

1. PayPay と SUICA

ここ数ヶ月の最も大きな変化と言えればあれこれ PayPay で払うようになったことだった。これまでもカードを使っていなかったわけではない。チャージして使うカードはいくつか持っていた。ところがここに来て、もう全て PayPay にまとめてみようかという気持ちになった。意外にやってみると快適だ。PayPay はあちこちの店で使える。

思えば、日本はキャッシュレス化がまだまだ進んでいない。アメリカに行くと日本のお札は本当に綺麗だと思う。アメリカはどの金額のお札も色やサイズは一緒だし、ぐちゃぐちゃに丸めている人が多い。これは昔からだ。アメリカは日本人ほど現金を使うということはないからなのだろう。俺がアメリカに留学していた 33 年前はチェックブックで買い物をしてきた。綺麗な柄が入った小切手で小さな額のやつでも、これで買い物できる。だから現金なんてチェックブックを受け入れてくれないところ以外では使わない。ちなみに 1 年間アメリカで生活してチェックブックを受け入れてくれなかったのは、映画館とバスだけだった。他は全て使えたのだ。

2 年前にアメリカに行った時は、マネークリップというやつがあって、クリップでお札を止めて、それをポケットなどに入れていることがわかった。どっちみち大きな現金は使わないからということなのだろうか。お札を裸のまま持っているというのもアメリカらしくていいなあと思ったものだった。

これからは俺も PayPay に変えよう。これで小銭入らず。使ったお金の記録も残る。一石二鳥、断捨離である。

最近になって、京都の市バスでトラフィカカードが使えなくなった。これまで 1000 円で 1100 円分使えていたのでいつも愛用していた。一日券も 600 円から値上がりして 700 円になる。京都のバス賃は 230 円なので、これまでは 3 回乗るんだったら一日券を買った方が得だったのだが 4 回乗る



男は 痛い



國友万裕

第41回

『老後の資金が
ありません！』

んでなくては得じゃなくなる。

それで、これからは徹底的に SUICA を使うことになった。これ、確か東京に行った時に作ったもので、関西は ICOCA を使っている人が多いのだが、どっちみち名称が違うだけで内容はほとんど同じなのでこの頃は SUICA ばかり、しかもスマホのアプリなので極めて楽である。これで京都でバスに乗る時ももっぱらスマホだけあればいい。さらに SUICA はコンビニなどでも使える。PayPay にお金が不足しているときは SUICA で払えばいいのだ。

これで通勤の時もスマホひとつで行ける。また一つ断捨離である。

PayPay と SUICA の生活は極めて快適で、スマホだけあれば出歩ける。これからお札の顔を見ることがどんどん減っていくだろうなあ。

この頃は映画のレンタルももはや配信の時代である。TSUTAYA にはほとんど行かなくなった。本はもっぱら Amazon で買っている。しかも俺はできる限り kindle 本を買うことにしている。スペースを取りたくないのだった。さらに、服もこの頃ヤフーオークションで安く買っている。支払いも現金ではなくクレジットカード。

徐々に生活は身軽になっている。まさにネット時代の断捨離生活である。できる限り、面倒なことは減らしていくそういう生活になってきたのだ。

2. いつかは「死」になる。

久しぶりに友人と会った。彼とは大の仲良しなのだが、コロナのせいで会うことができず、半年くらいぶりである。お互いお風呂好きなので、場所は大阪のスパワールドだが、スパワールドに来たのはコロナになって初めてだ。彼と親しくなって 20 年。もう何十回もスパワールドには来ているが、前回来てから 2 年ぶりくらいかも知れない。いつも通り、風呂に浸かって、風月のお好み焼きを食べた。

帰りに気づいたのは通天閣のフグがなくなって

いることだった。

「もうだいぶ前からですよ」と彼からは言われた。スパワールドの近くの空中にあがっていたフグのバルーンは 1 年以上前にづぼら屋が閉店することになったためなくなっただけだ。悲しいけれど、フグは断捨離されてしまったのだった。なんとなく寂しかった。それまでスパワールドに来るたびにこのバルーンを見ると大阪に来たという気持ちになったものだったのに……。通天閣の界隈はいまだに串カツ屋さんや囲碁道場みたいなドヤ街の風物が立ち並ぶ、大阪らしいところなのだから、フグも残しておいて良かったところなのに。

でも仕方がないことなのだろう。京都には文化財として保護されている古い建物がたくさんあるが、お店の宣伝のためのバルーンまでいつまでも保護しておくわけにもいかない。また一つものが消えて、新しいものが生まれていく、新しい文化が生まれていく。世は無情なのだ。世の中、全てこんなもの。地球の歴史は何億年も続いていくので、どれだけ長く存在したものでも、ある日そっけなくなくなる日は来るのだった。

人生だって、同じだ。不幸な人でも、幸せな人でも、人間なんて最終的にはみんな死ぬ。そのことだけは避けられない。この原稿を書いている最中にも細木数子が死に、瀬戸内寂聴が死んだ。母は細木数子と同じ 83 歳で今でも元気なのだが、いつ何が起こるか分からない。今度実家に帰った時はお墓の相談もしなくてはならない。俺も弟も結婚していないので、母が死んだらお墓の世話をする人がいなくなる。子供が減っているのは俺の家だけじゃないから、そのうちお寺も潰れていくだろう。新たな納骨制度が始まるのではないか。俺は故郷を憎んで生きてきたため、死んだら西本願寺に入るか、キリスト教の墓地に入れてもらうかどっちかだと思っているが、俺が死んだ後、母や先祖の墓参りは誰に頼んだらいいのか。死んだ後のことなんてほっときやどうにかなると若い時は思っていたのだが、流石に 60 近くになると気になってくるのだった。

11月になって突然ある先生から連絡が来た。その先生は定年退職なさってから京都に来られていなかったのだが、久々に京都に来ることになったので食事に誘ってくださったのだ。まだコロナは終わっていないらしくて木屋町にある名店なのに、ほとんどお客さんは入っていない。そこで豆腐料理を食べながら先生と話した。この先生はとても良い先生だ。真面目で威張らない人だし、いつだって奢ってくれる。

俺がその先生と出会ったのはまだ30ぐらいの頃だ。それからもう四半世紀。30代の前半だった俺は50代後半となり、40代後半だった先生は70代になられた。その間に俺は平和に見えて波乱の人生を歩んだ。いや、俺の心は嵐の日が多かったが、そこで掴み取るものも多かった。この15年くらい、俺は幸せだ。それなりに恵まれた人生だった、だからこそ、人生の終わりが気になるのだろう。

その日は、その先生と「死」について語り合った。その先生が言うには、宇宙飛行士の人は宇宙に出ると「死」の存在を理解するということだった。宇宙にいくと全くの沈黙という時間が長くあるらしい。しかも光も射さない。真っ暗な世界。これがおそらく「死」なんだと彼らは感じるみたいだ。そうなのだ、この世で暮らしていると全くの沈黙ということはまずない。今俺はパソコンに向かってこの原稿を打っているが、夜の寝室でもヒーターの音が聞こえている。この世に全くの「静」なんて存在しないのだ。

その先生は、今は仕事はしていないのだが、家で過ごすことになっても退屈はしないとおっしゃっていた。俺は家にいると退屈してしまうのだが、それは今、仕事をたくさんしているからで、家にいるのがメインになったらそのモードにはいつてしまうのかも知れなかった。家にいてもそれなりにすることはあるのだそう。今はこれまで溜まっていたものを断捨離しているとのことだった。その先生と俺は16歳違いだ。俺はまだ15年くらいは頑張らなくてはならない。まだ断捨離とか終

活をするには早いのかも知れないと思った。

だんだんアラ還に近づいているので、1日に一度は死ぬ時のことを考える。死後の世界についての本を読んでいた時期もあったが、どっちにしろ、死の恐怖はなくなる。臨死体験をした人たちは、一様に死後の世界は怖くない、臨死体験をすると死ぬことが怖くなくなると言っているとのことである。とはいうものの、彼らが目撃したのは本当に死後の世界なのかどうかの確証はない。いくら考えても誰にもわからないことなのだ。死後の世界について思い巡らすこともしばらく断捨離しようと思った。

二人で2時間ほど話をした後、先生はいつも通り、俺の分も奢ってくれた。もう何十回目かなあ。俺はこの先生と食事をして、自分が払ったことは一度もないのだった。

久しぶりにかつての教え子とも会った。彼とはSNSで繋がっていたのだが、突然メッセージが来て彼の方が誘ってきた。彼は20代後半で最近になって結婚し、しかも奥さんとは俺のクラスで知り合ったらしい。今奥さんは単身赴任中で、彼一人のため、たまたま気が向いて俺に連絡してくれたみたいだった。まだ子供はいない、共働き世帯で、奥さんがこっちにいるときは、料理は彼女がしてくれるのだが、片付けや掃除、洗濯は彼がしているとっていた。

いつの間にか男性が家事をするのは常識となってしまった。彼もナチュラルでそのことを嫌がっているわけではない。当然のこととして受け入れている。ほんの数10年くらい前までは「男子厨房に入らず」なんていう言葉があったことを考えれば、男女関係は信じられないくらいに変わっているのだ。そういえば、昔は既婚の女性が単身赴任なんていう話も聞かなかった。

彼とはうちの近くの焼き鳥屋さんで2時間ほど食べながら食事をした。やはり二人で食事をするのならば2時間が目安なのだろうか。今度は俺の方が奢った。

彼とはSNSで繋がっていたことで、長年のブラ

ンクがあるのに再会できた。そのことを考えれば、SNSは断捨離しないほうがいいだろう。この頃、SNSはアカウント持っているだけで見ていない人が増えているし、繋がっている友達の中には名前すら覚えていない人もいるので、そろそろ断捨離しようかとも考えていたのだった。

3. 身体を治癒し、心も断捨離

猫背改善ベルトを買った。猫背は子供の頃からだ。俺は大体胸を張って生きてことがない。常に誰かに気を遣っていた。俺は常にカーストの一番下の男子だった。したがって、性格が体型にまで影響してしまったのだ。

装着して数日は快適に思えた。これをつけておくと肩こりが治ると聞いていたのだが、事実数日はマシなようにも思えたのだ。しかし、その後痛みが激しくてどうしようもなくなっていった。

これまでとは違った姿勢で生活することになり、どこかに無理が来てしまっているのだろう。スパワールドでは、1時間かけてマッサージをもらったのだが、もみ返しと湯疲れが来てしまったみたいで翌日はつらかった。近所のリラくるに駆け込んで、30分だけマッサージしてもらった。それでもつらい。その後今度はいつものマッサージの人に家に来てもらったが、まだしんどい。その後、ボクシングに行って、整体師のお兄さんにマッサージしてもらった。なんと週に4回もマッサージ。これではお金が持たない。何とかしなくては！

猫背は腹筋が問題しているみたいで、猫背矯正ベルトも肩の形を矯正するのではなく、腹を矯正するベルトを買った方がいいとのことだった。腹筋かあ〜俺が一番苦手な分野だ。単純に家で少しずつ腹筋すればいいのだろうが、翌日どうなるかが怖くてできないのだ。翌日、筋肉痛で仕事できなくなったら・・・俺はそういうことを心配しなくてはならない歳になってしまったのだ。

また、最近になって漢方薬も買った。頻尿なの

だ。前にミニドッグを受けた時に言われたのは、年齢的に尿の問題が出てくる歳なのだそうだ。トイレに行っても尿は出ないのだが、尿意だけがあって、何度もトイレに立ってしまう。これをどうにかしなくてはならない。漢方薬を飲むようになって、多少は尿の出が良くなってきたようには感じる。でも気のせいなのかも知れない。まだまだ道は長い。

俺の人生はもう終わりに近づこうとしている。それが最近になって感じることだ。昔ほどがむしやらしするような気分でもなくなっている。そこそこに頑張っ、そこそこにやっしていればそれでいいかという気持ちだ。これは投げやりなのではなく、居直りなのだった。自分の限界がわかってきた。人間の人生は運によるものが大きい、したがって、報われようが報われまいが、それは全て運なのだという気持ちになってきている。

幸い、人の不幸を喜ぶこともなくなってきた。人と比べて優越感を感じることもなくなった。永遠に生きたいとも思わなくなってきた。もうこの世での生活に徐々に疲れが出始めているのだ。俺はこれから先30年生きたいとは思わない。とは言うものの、死ぬのは怖い。人生に対する執着が全くなかったわけではないのだ。

今、スポーツクラブはお金は入れているのだが、ほとんど行っていない。勿体無いのだが、やめてしまうと全く縁が切れる。スポーツマンでは無くなってしまふ。せっかく、水泳はできるようになったのに、プールには一生繋がっておきたい。でも勿体無いなあ。

その一方でボクシングジムは、チケット会員なので、時々行けば良いのでどうにか通っている。俺のトレーナーは元教え子の男の子だ。彼はイケメンで、お坊ちゃんで、スポーツマン。彼を見てるとつくづく俺もこう生まれたかったと思う。

今の子を見ていて思うのは、昔よりも確実に優しくなっているし、礼儀正しくなっていることだ。今は自殺、引きこもり、失業、神経症などが日常時になってきているため、自分だって場

合によってはそうなると思っているのだろう。

これは昔に比べれば大きな進歩だ。

今だって思う。中学校の時の体育教師の家に行って文句を言ってやろうかと。しかし、そんなことをしても俺が罰せられるだけのこと。悲しいことに。あいつは校長になったというけど、あれから40年以上も経っているから、その間にはあいつも成長はしているのかも知れない。俺が引きこもりだった頃に、ある女性の映画評論家が不登校の子に対して全く無理解な発言をしていたことを思い出す。今あんなことを言ったら大変なことになるだろう。しかし、あの当時の人たちは、世間の規範は一つしかないと頑なに信じていたのだ。今思えば愚かしい人たち。そういう育ち方しかできなかった彼らもかわいそうなんだから、それはそれで許してあげなくてはならないのかも知れない。

しかし、トラウマは終わらない。

やはり、こうやって振り返ってみると俺の人生はまだ昔のわだかまりを消化していない。人間は変わるようで変わらない。俺だってまだ完全に変わったわけではないのだった。

しかし、どうすることもできないのならば、その感情と付き合いつつ、一生を終えていくしかない。今まで60年近くも生きてきたのだから、これからの人生もできるはずだ。そう思いたいところだ。

これからは心の断捨離をどうにかしなくては！綺麗な心でこの世から旅立ちたいと思う。還暦を過ぎたら、自分のためよりも他人のために生きることを考えよう。

4. 変わるイケメン

最近、若い男性の顔が変わってきたように思う。俺は、今の日本の若い男優では、真剣佑はイケメンだと思うのに、吉沢亮はイケメンだと思わない。そのことを学生たちに話すと、「今は中性的な顔が流行りなんですよ」とのこと。真剣佑も綺麗な顔だけど、彼は「戦う男」というイメージがあるか

ら、吉沢亮に比べれば伝統的な男性顔とのことである。

なるほど、戦わない男、ただ美しい男が今は流行しているのだ。そう考えれば良い傾向と言えるだろう。俺は「男は戦う性」であるという考えにずっと反発してきたのだから。中性的な顔の男性をイケメンと思わない俺は、まだ男らしさに囚われているのかも知れない。やはり感覚が古いんだろう。仕方がない。俺はもうアラ還だ。学生たちとは親子以上に歳が離れてしまっている。

もっと年代が上の俳優で、俺がイケメンだと思うのは、山田孝之と妻夫木聡である。皮肉なことに二人とも九州の出身だ。俺はこれまでこの連載にも書いてきた通り、九州での少年時代に怨念を抱いているので九州の人と聞いただけで偏見を持ってしまう。しかし、にもかかわらず、イケメンになったら、この二人を思い出す。俺は結局、ソース顔で目鼻立ちがきちっとした人をイケメンと思ってしまうらしい。

妻夫木と山田は二人とも『ウォーターボーイズ』でブレイクしている。妻夫木は映画版でデビュー。山田はテレビ版である。ウォーターボーイズは競技としてのスポーツではなく、男の子の裸を可愛く撮ったという意味でいい映画だった。

山田孝之は、最近、『はるヲうるひと』で、小さな島の売春宿で働いている主人公を演じている。山田は、『ウシジマ君』『電車男』『全裸監督』『凶悪』など、こういう役が専門になってきている。彼のようなイケメンがこういうオタク系や癖のある系の役を演じてくれるのは嬉しいことだ。

しかも、彼は胸毛がある。それも相当濃いみたいで、その証拠に彼は髭剃りあとも物凄い。

過去の日本のスターで、誰よりも胸毛で有名なのは加山雄三だろう。しかし彼は肌の色が濃い、スポーツマンだ。加山雄三は海の男でもあるので、映画の中でも相当海水パンツ姿を披露している。もちろん、胸毛もたっぷりだ。

山田孝之は色白で特別スポーツマン的なタイプではないので、胸毛のニュアンスが違ってくる。

ちなみに山田は映画で裸になる時は、大概是剃っているみたいで、よほど胸毛があった方がよいキャラの時以外に彼の胸毛は見たことがない。

やはり、加山や黒沢年男や長嶋茂雄のような胸毛のある男が女性から人気のあるスターになることはもはや難しいのかもしれない。今の若い男子はエステもしているし、他の学生たちも、「したいやつはすればいい」と言っていた。そうなってくると、これから胸毛キャラの役者はますます少なくなっていくだろう。胸毛のあるやつは剃ってこいということになるからである。

かつては日本の女性は、胸毛は嫌いだと答える女性が多くて、俺は何度も腹が立ったものだ。昔の女性たちは、自分達は容貌のことを言われると深く傷つく癖に、男には言っていないと思っていた。その一方で胸毛を気にしたりする男は男らしくないとも宣っていた。男なら容姿のことなんて気にするなという考えである。今はそういう女性は減って、男のエステも増えて、かくいう俺もついに胸毛の除去に成功したので、これで一人前になったという気持ちだ。男が外見を気にことが許されるようになった。これも進歩なのである。

妻夫木は『悪人』では癖のある役をやっているが、彼の方が山田よりも屈折していない好青年というイメージが強いと思われる。彼の映画で何よりも印象に残っているのは『ジョゼと虎と魚たち』の街中で泣く場面。ナイーブで、息子にしたいというイメージの役が似合う人である。

ちなみにドラマ版の『ウォーターボーイズ』には森山未来や瑛太も出ている。森山未来はイケメンではないが、『苦役列車』『アンダードッグ』などハンタリーな男の役が意外に似合う人だ。瑛太は、『まぼろ駅前多田便利軒』『友罪』『リングサイドストーリー』などが代表作だろう。こうやって4人並べてみると妻夫木が一番明るくて優等生的である。こういう子を親は持ちたいと思うのだろう。

この頃、日活映画の古い映画が、アマプラで見られるようになってきた。吉永小百合や石原裕次郎などまさに戦後高度成長期を象徴するようなス

ターたちが主演を演じている。しかし、俺は吉永小百合が演じるヒロインには反発を感じる。クラス委員キャラと言ったらいいだろうか。裕次郎など男子の方は皆ちょっとずつ捻くれているが、それを制する女性として彼女は現れるのである。まさに清純派の代名詞。健気でひたむきな優等生。そこが、今となっては胡散臭い。

この時代の映画を見ていると、「この頃の日本は貧しかったんだねー。だけど、あんたたちは幸せだよー。こんな単純でアホでも生きれるような時代に生まれて」と叫びたくなる。愚かしい時代である。

その後の70年代となると秋吉久美子や桃井かおりなどが大胆なヌードを披露し、「シラケの時代、万歳」という雰囲気になる。この時代の映画は青春のやるせなさを描いているので、若い頃は共感したりもしたものだが、今見直すと、「セックスばかり考えているんじゃないよ。品がないんだよ。あんたたち」と言いたくなる。

80年代はただひたすら明るい時代。薬師丸ひろ子や斉藤由貴の時代だ。俺はこの世代に属するが、俺は時代の流れについて行かれなかった男なので、映画としてはそれなりに良くできていても、気分が悪くなる部分があるのだった。あの頃はネアカ時代だったので、暗いことが罪であるかのように言われたのだった。

そこでバブルが弾けて、90年代は多少陰りが見え始めた時代。そして21世紀は徘徊の時代である。ポストモダン、「私たちから私の時代へ」と言われるが、全体の規範よりも個々の人々を考える時代だ。自分を殺してまで大勢に従う必要はない。

幸い、結婚制度はだいぶ破綻してきて、一生結婚したくない人は増えている。駆け落ちや心中やリストカットも聞かなくなった。今の若い人は、仕事があまく行かなくて自殺する人はいるけれど、恋愛のためには死なない。そもそも、俺の両親の時代はまだ見合いで結婚する人が多かったわけで、恋愛至上主義の80年代が変な時代だったのだ。

こう考えてくると今の方がいい！ 男がムダ毛を処理しても構わない。恋愛至上主義でなくても構わない世の中になったからである。俺はもっと遅れて生まれてくるべきだった。

5. 『老後の資金がありません！』

(前田哲監督・2021)

タイトルに惹かれてこの映画を見た。

ストーリーはタイトルを見ただけで何となくわかる。天海祐希の主演だが、彼女はごく普通の主婦で夫と子供二人の4人暮らし。ヨガに通っていて、他のお婆さんと世間話をしているような生活臭のする主婦である。

その彼女が姑(草笛光子)を預かることになるのだが、このお婆さん、老年になっても至って元気、天然みたいな人で、オレオレ詐欺にひっかかったり、後先のことも考えずに散財したりしてしまう。娘は結婚するため、結婚費用がかかる。それに追い打ちをかけるように夫は失業である。預金残高はみるみる減っていく。

ここまで来ると作り話であることは歴然としている。いくら何でも、ここまで短期間にこれだけの深刻なトラブルが連続して起きるといえるのはでき過ぎている。あくまで娯楽と割り切って見る映画なのだ。

現実的に考えれば、深刻な話なのだが、それを明るく笑い飛ばす映画である。何よりも「うちは二人とも失業中だから」という台詞がいいと思った。昔だったら、こういう場合に経済的責任のしかかるのは男の方だったはず。今は必ずしもそうではないのだ。共働きが普通になってしまっている。

天海扮する妻は夫の失業の連絡を受けた時に、経済状態よりも彼が自殺でもするかと心配になる。これもいい。仕事がなくなったからといって自殺することはない。昔だったら、男が仕事を無くすとなったら、それこそ命を無くすような一大事だったのだろうけど、その縛りから男を解放してあ

げなくてはならない時代となったのだ。

夫がハローワークに仕事を探しに行くと、「同じ会社しか知らない男」であるがため、新しい仕事が難しいというフレーズが出てくる。昔だったら、一つの会社に留まるのが出世の道だったはずだが、今はそうとも見てもらえないのだということがわかってくる。

そしてラストは、予想通り、お金なんかなくても幸せはあるのだというところで終わる。

草笛光子は最近になって、年齢の割に若い女優の代名詞的存在になってしまったが、この映画はハマり役である。一方、天海祐希は、綺麗だけでも男顔の女性だ。ジェンダーの反転の時代なのである。

そういえば、最近『猿楽町で会いましょう』という映画も見したが、この映画でヒロインと同じところでバイトしている男の子(大窪一衛)が、中性的なキャラ。ゲイ役なのかと思って見ていたら、そうではなく、ヒロインを襲おうとする場面が出てくる。この人、声色が極めてユニークである。

『きのう何食べた』の劇場版では、内野聖陽があまりにもゲイ役がいたにつき過ぎてきて、やや臭く感じるようになってしまった。彼にとってはこの役は当たり役だが、彼がうまく演じれば演じるほど、ゲイの人を真似して、馬鹿にしているようにも見えてくるのだった。

これからはステレオタイプを外さなくてはならない。映画はどこまでステレオタイプから外した描き方ができるのか。それが今、俺が関心を持って見ているところだ。

こう考えてくると、まだまだ関心事はたくさんある。これから俺も長生きする価値はありそうだ！